
KALEIDO NOTE

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KALEIDO NOTE

【Nコード】

N8874M

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

ジャンルごった煮二次創作短編集。現在『ハリー・ポッター』シリーズ2作品、『ブレイブストーリー』（劇場版）¹ 1作品、『BLEACH』¹ 1作品収録済。だれも知らない、けれど確かにそこにあった、ささめくような想いの一片。【不定期更新】

ペールのむこうに（ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団）（前書き）

シリウスとリリー（とハリー）。シリウス・ブラック追悼記念。
シリウス↓リリー風味。

ベールのむこうに（ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団）

ぐらりと、視界が大きく揺れた。

自分の体が後ろへ傾いていくのを、奇妙なほどゆっくりと感じていた。とっさに伸ばした手は空を掻き、何も掴むことができなかった。

視界いっぱいには紗のベールが大きく翻る。その向こうに、こちらに向かって駆けてくる少年が見えた。

ハリー。

名前を呼ぼうとして唇を動かしたが、なぜか声にならなかった。杖を握りしめ、息を切らして走ってくるあの子が、必死な顔で叫んでいる。

俺の名前、を。

応えなければ。

あの子が俺を呼ぶ限り。俺を、必要とする限り。

それなのに、声が出ない。

ベールが閉ざされていく。ハリーの姿が薄い布の向こうに消えていく。

ああ……。

すまない、ハリー。またきみに残される悲しみを与えてしまう。もう二度とつらい目になんて遭わせたくなかったのに。

いつか一緒に暮らそうという約束、守れなくなってしまった。

……リリー。

きみとの約束も——結局、守れなかったな……。

「シリウス、お願いがあるの」

会話が途切れてできたわずかな沈黙を、不意にリリーが破った。

突然のことに俺は目を瞬かせた。それまでの会話の内容の他愛なさ比べ、見つめてくるリリーの緑の瞳は真剣そのものだった。

リリーはとてもまっすぐな目をしている。どんな相手でも彼女のまなざしが逸らされることはない。逸らすのは、決まって見つめられる相手のほうだ。

きっとジェームズは、リリーのこんな強さに惹かれたんだろう。

鋭く射抜く視線は、心の奥底まで見透かされるような恐怖と――抗いがたい、吸いこまれてしまいそうな引力を感じさせる。

そんなことをぼんやりと考えながら、俺はリリーに尋ねた。

「お願い？」

「そう」

リリーは小さく頷くと、ちらりと部屋の隅に置かれた揺籃ゆりかごを一瞥した。俺もつられて揺籃に視線を移した。

籐の蔓を編んで作られた古風な揺籃の中には、小さな赤ん坊がすやすやと眠っていた。パステルブルーの産着で男の子だとわかる。

リリーと、俺の長年の悪友であるジェームズの息子、ハリー。

リリーはソファから立ち上がると、そっと揺籃に近づいた。しゃがみこんで我が子の寝顔を覗きこむ。

ハリーを見つめるリリーの瞳は、とてもやわらかくて優しかった。ジェームズを見るときとはちよつと違う、母親のまなざし。

「……もしかしてハリーのことか？」

ふたりに頼まれ、俺はハリーの名づけ親になった。それはそのまま、俺がハリーの後見人であることを意味する。

今更頼まれなくても、俺は名づけ子のためならなんでもするつもりだった。俺は独身で子どももないが、ハリーはもはや我が子同然だった。

「わざわざ言わなくてもわかってるつもりだ」

「……そうよね」

ハリーを見つめたまま、リリーはぽつりと呟いた。

「あなたがこの子の名づけ親を引き受けてくれたとき、とっくにわ

かったことよね」

「だったら——」

「でも違うの」

俺の言葉をリリーが遮る。リリーは振り返ると、今にも泣き出すような表情で言った。

「違うの、シリウス。わたしが欲しいのは暗黙の了解じゃない。ちゃんとした、確かな約束なの」

彼女の声は震えていた。

「あなたを信じてないわけじゃない。ただ……ただ、わたしの心を支えるための、約束が欲しいの」

リリーはぺたりと床に座りこみ、自分自身を抱きしめた。こみ上げてくる恐怖を必死に押さえこもうとするように。

俺は思わず立ち上ってリリーに駆け寄った。傍らに膝をつき、微かに震えている肩に触れる。

「リリー」

「——怖いの」

俺の手にすがりながら、リリーは言った。

「怖くて、怖くて怖くてたまらない。あなたが、リーマスがピーターがいるのに、絶対に見つからないのに……怖くてたまらないの」
翡翠のようなリリーの瞳がみるみるうちに潤んでいく。俺の腕を掴む指の力がぎゅっと強くなる。

「もし『あの人』に見つかったら……ここに踏みこまれて、ジェームズやハリーが殺されてしまったら……」

「馬鹿なこと言うな。そんなこと絶対にあるわけない」

「でも怖いの!」

リリーは悲鳴のような声を上げた。その拍子に目の縁に溜まっていた涙がぱつと散る。

「わかってる!でも、でも……っ」

最後のほうは言葉になっていなかった。白い喉がひくりと震え、引き絞るような嗚咽が唇から溢れ出す。

俺はリリーを抱き寄せた。そうしなければいけないように、思えて。

「リリー……」

やわらかな髪の毛を頬に感じる。リリーは俺の肩に顔を埋め、胸にしがみついて泣いていた。

「——約束する」

無意識のうちに言葉がこぼれ落ちた。

「約束する。おまえたちを必ず守る。ヴォルデモートなんかには殺させやしない。だが万が一何かあったら——ハリーは、俺が守る」

リリーの嗚咽が小さくなった。腕の中で微かに身動いだのを感じて抱擁をゆるめると、俯いていた顔がゆっくりと上がる。

「俺があの子を立派に育てる。おまえとジェームズの息子にふさわしい、一人前の魔法使いになるまで。あの子が必要とする限り、俺はそれに応え続ける」

「シリウス……」

「だから——泣くな」

本当はそんなこと、起こってほしくない。

ふたりが死ぬなんてこと、だれかが裏切るなんてこと、考えたくない。

だけど。

リリーが約束してほしいなら、何度でも誓おう。それで彼女の恐怖が少しでも薄れるなら。

……馬鹿だと思っ。

それでも——俺は誓わずにはいられなかった。

リリーは黙って俺を見つめていたが、ふと双眸を細めた。涙に濡れた面に笑みが広がっていく。

花が咲いたようだった。

「……ありがとう、シリウス」

「——……どういたしまして」

一瞬の間のあと、俺はどうにか答えた。

ふと赤ん坊のぐずる小さな声が聞こえた。リリーはごしごしと目をこすると、ゆるんでいた俺の腕を解いて立ち上がった。

「ああ、ごめんね、ハリー。起こしちゃったわね」

揺籃からハリーを抱き上げ、包むこむように胸に抱く。体を小さく揺らしてあやす姿は母親そのもので、さっきまで子どものように泣いていたとはとても思えない。

俺はひとり取り残されたような気持ちになった。がりがりと頭を搔いて立ち上がる。

なんだか、ハリーが少し恨めしかった。

あれから、ずいぶん経った。

ふたりの死も、ピーターの裏切りも——何もかも起こってしまった。

たったひとり残された……ハリー。

ピーターの姦計にはまり、そばにいることさえ叶わなかった。やっとアズカバンから逃げ出して、大きくなったきみの姿を目にしたとき——どんなに嬉しかっただろう。

くしゃくしゃの黒髪やちょっと生意気そうな顔立ちは、ジェームズにそっくりだった。だけどあの緑の瞳は、リリーから受け継いだものだった。

ハリー。

本当にすまない。最後まで守れなくて。そばにいられなくて。約束を破ってしまった。

きみはきつと泣くだろう。男の子だから、だれの目にも触れないところでひっそりと、声を押し殺して。

それが、とてもつらい。

だけど、どうか忘れないでくれ。きみのそばにはきみを支えてくれる人たちがたくさんいることを。きみはもうひとりじゃない。

リーマス。

ダンブルドア先生、ロン、ハーマイオニー、みんな。

先に逝くことをどうか許してほしい。そして、ハリーを頼む。

ヴォルデモートとの戦いのなかで、あの子はこれからもたくさん傷ついていくだろう。倒れそうになるあの子を支えてやってくれ。

リリー。

約束、守れなくてすまない。ハリーにまた悲しい思いをさせてしまった。

だけど、思うんだ。

あの子は強い。何度くじけそうになってもそのたびに踏ん張って、毅然と顔を上げていた。これからもきつとそうだろう。

だから、大丈夫だ。

……俺がそう思いたただけだって、怒るかい？

でもあの子は、きみとジェームズの息子なんだから。

リリー、……ジェームズ。

そろそろそっちに行くよ。早すぎたってきみたちは怒鳴るかもしれないけれど——最後は笑ってくれるんだろうな。

視界いっぱいに紗のベールが大きく翻る。あの子の姿が見えなくなっていく。

(……シリウス)

視界が閉ざされた、その瞬間。

とても懐かしくて愛しい声に、呼ばれたような気がした。

きみという奇跡（ブレイクストーリー）（前書き）

劇場版より、巨と美鶴。エンディング考察。

きみという奇跡（ブレイブストーリー）

忘れてしまったってかまわない。
ただここにいてくれるなら。

「――あ」

下駄箱の前で佇む少年を認めた瞬間、亘は思わず声を上げていた。彼は靴を手にしたまま動きを止めていたが、すぐに端整な顔をしかめた。

突き刺すような視線に、亘はうぐつと喉を詰まらせた。瑕疵のない容貌ゆえか、妙に迫力というか威圧感があるのだ。

少年――美鶴はふいつと顔を背けた。

「……いつまでそうしてるつもりだ？ 他のやつ邪魔になるだろう」
温度の低い声に、亘はようやく目を瞬かせた。

「ああ、うん」

こぼれたのは、なんとも間抜けな返事だった。おたおたと上履きからスニーカーに履き替えているうちに、美鶴はさっさと昇降口をくぐっていた。

「あ、芦川！」

反射的に呼び止めると、美鶴は気だるそうに振り返った。斜にかまえたような仕種が出会ったばかりの頃を思い起こさせ、泣きたいような気持ち胸をよぎった。

「何？」

面倒くさそうな、自分よりも高い場所から物事を眺めているような表情も同じだ。亘は顔を歪めかけ、ごまかすように微笑んだ。

呼べば当たり前のように応えが返ってくる。そんな些細なことが、たまらなく嬉しかった。

「あのさ。この間は、……ごめん」

途端に美鶴の眉間に皺が寄った。嫌味を言いたくても言えない、そんな顔に苦笑してしまう。

「驚いたよな。いきなり名前呼んで、抱きついたりしちゃって」
ランドセルを背負い直しながら、立ち尽くす美鶴に歩み寄る。じつと探るような視線が返ってきた。

亘はまっすぐ美鶴の瞳を見つめた。

あのとき、^{ヴィジョン}幻界で、運命の塔で。自分は確かに彼を看取った。空へと消えていく彼を見送ることしかできなかった。

けれど今、美鶴は亘の目の前に立っている。幻界を滅ぼしてでも取り戻そうとした妹とともに、この世界に生きている。

なぜ喪われたはずのふたりが存在しているのか、亘にはわからない。運命の女神のはからいか、それともただの偶然か。

だがひとつだけはつきりしているのは、この奇跡が代償の上に成り立っているということだ。

「ぼくたち……初対面だったのに」

美鶴には、幻界の——かつて転校生としてこの学校へやってきて亘と出会った記憶が、一切残っていなかった。

そもそも美鶴の人生において、最愛の妹の喪失、運命を変えるために幻界へ続く扉をくぐったこと、そして亘との邂逅は、すべて起こらなかった出来事であるらしかった。彼は妹を亡くすことなく、幻界へ赴くこともなく、ごく普通の少年としての日常を過ごし——亘と『出会った』。

美鶴の歩んできた過去と引き替えに奇跡は起こったのだ。

まるで、運命を塗り変えたように。

「……なんでおれのこと知ってるんだ？」

吐息のような声で美鶴が尋ねてくる。

亘は目を伏せた。

当然だよ。ぼくたちは友達なんだから。

そんな風に笑って答えられたら、どんなにいいだろうだ。

しかしそれは、きっと大それた望みに違いない。

「似てるんだ」

ぼつりと、亘は呟いた。

今から自分の言うことは、嘘なのだろうか。偽りと呼ぶべきなのだろうか。

もしそうだとしても、きっと傷つくのは自分ひとりなのだからかまわない。

「ぼくの、友達に」

「おれが？」

亘は頷いた。視線を上げると、美鶴は微かな戸惑いを滲ませていた。

「うん。びっくりするくらい、よく似てる」

「そいつも『ミツル』っていうのか？」

「そう」

たん、と亘は跳ぶように一歩前に出た。くるりと美鶴を振り返る。「もういないんだ。会えないんだ。だから……だから芦川を見たとき、あいつが——ミツルが帰ってきたんだって、思ったんだ」

名前を口にした瞬間、美鶴の瞳が揺らいだ。

亘はそれに気づかないフリをする。

いいんだ。

忘れちゃったっていいんだよ。

「結局、ぼくの勘違いだったんだけど」

ぼくは憶えてる。

美鶴の分まで、ちゃんと憶えてるから。

「だからさ、芦川。気にしなくていいよ。忘れちゃって、いいよ」

亘は目を細めた。ちゃんと笑えているだろうか。

美鶴は何も言わず、唇を引き結んでいる。さまざまな感情が入り混じった、複雑なまなざし。

訴えかけてくるような双眸を振りきって、亘は片手を上げた。

「じゃあ、ぼくもう行くね。また明日」

踵^{きびす}を返し、そのまま駆け出そうとする——そのとき。

「——水谷！」

力強い声が、地面を蹴りかけた亘の足を止めた。

驚いて振り向くと、怒ったような顔で美鶴が追いかけてくる。

「おまえ、一方的すぎ」

「え」

「気にすんなどか言つといて、そんな風に逃げるなよ」

わずかに高い位置にある切れ長な目を、亘は困惑しながら仰いだ。

「別に、逃げてなんか」

「嘘つけ。つか、そういう顔すんな」

「そういう……？」

美鶴は呆れた口調で、「泣きたいくせに笑うなつてこと」と言った。

「だいたいさ、ここで別れなくつたっていいじゃん。どうせ途中まで一緒なんだろうし」

「ぼ、ぼくは」

「それにさ。おまえには、やってきて間もない転校生に町案内してやろうとか、そういう気遣いはないわけ？」

そんなに早く帰れるなら暇なんだろう？ と、美鶴は薄い笑みを浮かべた。

亘はぼかんと口を開けた。どう反応すればいいのかわからない。

「はい決まり。ほら、とつとと行くぞ」

「え、ちょ、芦川！」

美鶴に腕を掴まれ、そのまま引きずられるように歩き出す。亘は目を白黒させていたが、不意にこみ上げてきた感情にぐつと唇を噛んだ。

自分との出会いを、幻界を旅したことを忘れられてしまったのは、やはり悲しい。さびしい。

だが——美鶴がいる。

ここにいる。生きて、呼吸して、歩いて、笑っている。

それ以上に喜ぶべきことが、感謝すべきことがあるだろうか。
忘れてしまったってかまわない。

ただここにいてくれるなら。

それだけで、亘は充分だから。

失ったものは大きく、けれど再び得たものは、何よりもかけがえない奇跡だった。

灰の雨は降りやまず（ハリー・ポッターと死の秘宝）（前書き）

スネイプ（とりりー）。ただひとつの愛に殉じた男の真実。

スネイプ↓りりー、ジエームズ×りりー風味。

灰の雨は降りやまず（ハリー・ポッターと死の秘宝）

もう一度会いたかった。

叶うならば、その足元で赦しを乞い、罪を懺悔し、胸の内に秘めた想いすべてを打ち明けたかった。愛していた、愛していると伝えたかった。

だが、こんな再会を望んでいたわけではない。

白い墓標をじっと見つめ、セブルスは呼びかけた。

「リリー」

応えはない。永遠に返ってこない。墓の下で眠る彼女の目はもはや覚めず、その魂は自分には手の届かぬ場所へ去ってしまった。

そつと墓石に触れる。冷たく固い、無機質な感触。セブルスは刻まれた名前を指先でたどった。

リリー・ポッター。

『Potter』の綴りに差しかかったとき、思わず爪が立った。セブルスは大きく顔を歪め、漆黒の瞳を昏い感情ごと覆い隠した。

今度こそ、本当に、自分は彼女を失った。信頼を裏切ったことでも、最も憎い男に奪われたことでもなく、死という絶対的な理によつて。

どれほど言葉を尽くしたところで、得られるのは蔑みのまなざしでも慈母のような微笑みでもなく、虚しい悲哀だけだった。もう憎まれることも赦されることもなく——愛されることもない。

灰は灰に、塵は塵に。

セブルスだけが取り残された。

「……………幸せでいてくれれば、それでいいと思ったのだ」

薄く目を開き、セブルスは呟いた。何を言えいいのか迷いながら。

「そう思うしかなかった。我輩には……………僕にはもう、きみを幸せにすることはできなかつたから」

墓前に佇む彼は、髪と瞳と同じ黒のローブを纏っていた。それは魔法使いを意味する色であり、闇を象徴する色であり、死者を悼む喪の色であった。

脂じみた黒髪も、陰鬱な夜色の瞳も、リリーは厭わなかった。優しく整えてくれた白魚のような指先、やわらかなまなざし。セブ、と親しげに愛称を呼ぶ声をはつきりと思い出せる。

比喩でも冗談でもなく、リリーはセブルスにとって光だった。汚泥にまみれ、地べたを這いずるような人生を照らしてくれた、太陽であり月だった。

希望、癒し、喜び、幸福。この世のどんなあたたかな言葉を尽くしても足りぬ、ただひとりの人。

自らの愚かさゆえに彼女を傷つけ、セブルスはリリーと歩む資格は失った。かつて己を嘲笑った男の花嫁となった姿を黙って見ているしかなかった。

それでも、笑っていたから。

幼い頃、自分の隣で見せていたものと変わらぬ笑顔があったから。リリーが幸せならそれでよかった。それだけでよかった。

憎まれても赦されなくても、二度と会えなくても。

そう思う心は、決して偽りではなかった。

「きみが死んでいいはずがない」

墓石に添えた掌を固く握りこみ、セブルスは唇を震わせた。

「きみが幸せでいてくれるから、笑っていてくれるから、生きて……いてくれるから、だから僕は、どんなに惨めで薄汚くても生きてこれたんだ」

リリーがいたからこそ、セブルスは認められたかった。

リリーがいたからこそ、世界に意味があった。

彼女のいない世界は、こんなにも、こんなにも。

「どうして僕は、ここにいるんだ……」

灰色の雨が降る。

幻のような燃え滓が、置き去りにされた哀れな男に降り注ぐ。

涙とともに溢れ出した嗚咽が喉を突く。セブルスは崩れるように膝をつく、墓石に額をこすりつけた。

獣のような慟哭をくり返し、セブルスはリリーの名を叫んだ。声が喰れるまで叫び続け、やがて墓所にふさわしい静寂が戻ってきた。セブルスはのろのろと顔を上げると、虚ろなまなざしで墓標を見つめた。

「……きみはもういない。どこにもいない」

拳をほどいた手で再び墓石を撫でる。何度も、何度も。

「もう、何も、ここには残って——」

いない、と続くはずだった言葉はふつりと途切れた。

深い穴のようだった瞳に光が射す。セブルスは目を見開き、動かしかけた唇を引き結んだ。

リリーは死んだ。

…… たったひとりの息子を守って。

彼女と同じ緑の瞳を持つ、彼女の子ども。

魔王を退け、生き残った赤ん坊は、母親の故郷に送られたと聞く。セブルスもよく知る、リリーの妹家族の許へと。

優れた魔法使いであった母の血を継ぐ少年は、やがて懐かしく呪わしい母校へ行くだろう。そこには、狡猾な魔王の姦計が蜘蛛の巣のごとく張りめぐらされているに違いない。

烙印が刻まれた腕に焼けつくような痛みを覚え、セブルスは深く息を吸って速まる鼓動を抑えた。

物言わぬ墓標に視線を囚われる。

「……リリー」

これは贖罪なのだろうか。それとも行き場のない愛の埋め合わせなのだろうか。

だが愛した人が命に代えて守った存在を、守りたいと願った存在を守り抜くことが、セブルスに唯一許され残された手段だ。

一度目を伏せ、セブルスは立ち上がった。墓標に向き直る。

「ずっと、きみを愛していた。これから、ずっと愛している」

それは約束だった。

もはや失われ、だが確かに自分に注がれていたリリーの愛に報いるための。

「永遠に、愛しているよ」

涙の乾いた頬をわずかにゆるめ、セブルスはそつと微笑んだ。

そして背を向け、歩き出す。

前を見据えた双眸に、灰の雨が映りこむ。そこに一瞬、こちらを見つめて微笑む緑の瞳がまぎれたような気がした。

降りやまぬ幻こそ、絶望と決意をよろつた真実の心だと、彼は気づかぬままだった。

アダムとイヴは永遠に（BLEACH）（前書き）

スタークとリリネット。375話に寄せて。

アダムとイヴは永遠に（BLEACH）

スタークはまじまじと目の前の少女を見つめた。

凝視されていることに気づいたのか、自分のものよりずっと大きく丸い瞳が居心地悪そうに睨んできた。

「なんだよ？」

「……いや」

外套とも呼べないぼろきれにくるまったりリリネットは、とても小柄だった。背丈はスタークの胸にも届かない。細い手足は、簡単に力をこめただけでぱきりと折れてしまいそうだ。スターク自身も痩せているが、彼は硬い鋼の芯が入っているような長身だった。

スタークは手を伸ばし、リリネットの頭をぽんぽんと軽く叩いた。
「ちっせえなあと思って」

「嫌味か！」

ぱしつと手を振り払われる。怒鳴る声は、高く幼かった。
「嫌味というか……」

目線より低い場所にだれかの頭があると撫でたくなるものなのだろうか。何度払い落としてもあきらめないスタークに、リリネットはついに白旗を上げたようだった。

「おまえは俺だったはずなのに、ぜんぜん似てないよな」

「……そんなの当たり前じゃん」

リリネットはげんなりとした表情に、呆れの色を混ぜた。

「確かにあたしはあんただったけど、あたしはもう『あたし』なんだから」

だから違って当然、と続けられた言葉に、スタークはひとつ瞬き、そうだなと呟いた。

かつて、ふたりは『ひとり』だった。

スタークがリリネットを生んだのか、リリネットがスタークを生んだのか。それとも同時に分かれたのか。わかるのは、自分たちは

だれよりも何よりも強くて、どうしようもないほど孤独だったことだけ。

白い砂漠と明けない夜がどこまでも続く虚圏。^{ウエコムンド}この永遠の世界をひとりで行くのは、あまりにもさびしすぎた。

だから、ふたりは生まれた。

同じ魂を共有しながら、スタークとリリネットの人格はまったく別の場所にあった。姿形に似通ったところが見られないのも、無自覚に『異なる存在』であることを意識したのかもしれない。

男と女。大人と子ども。示し合わせたように見事な対を成している。

「器用だな……」

「は？ だれが？」

「俺とおまえ」

「はあ？ まったく意味わかんないんだけど」

リリネットは怪訝そうに眉をひそめた。淡泊なスタークと違い、彼女の表情はくると変わる。幼い外見どおり、リリネットは未成熟で感情豊かな少女だった。どうやら性格も正反対らしい。

見ていて飽きないな、とスタークは思った。それはとても喜ばしいことだった。

「それでー？ 今日はどこに行くのさ」

「どこへでも」

「……あのさあ。たまにはビシツと『俺についてこい！』みたいに決めてくれない？ 毎回毎回あたしに振られても困るんだけど」

「じゃあ……東？」

「よし、東だな！ で、東ってどっち？」
「知らん」

太陽の昇らない虚圏で方角を知るのは至難の業だ。肩を竦めてみせたスタークに、リリネットはふるふると拳を震わせて叫んだ。

「馬鹿か——ッ！」

スタークはわずかに眉間に皺を寄せた。リリネットの甲高い怒鳴

り声は、あまり鼓膜に優しくない。

「『知らん』て！ 『知らん』て！ だったら答えるなアーツ！」

「おまえが決めるって言ったんだろっ」

「わかんなかったら意味ないだろうがっ！」

リリネットはうがーっと頭を掻きむしる。スタークはため息をつくと、すつと腕を伸ばした。

「じゃあ、こつちが東だ」

「……絶対適当に指差しただろ」

「いいだろ、別に——ほら行くぞ」

立ち上がって歩き出すと、慌ててリリネットが追いかけてきた。伸ばされた小さな手を受け止める。

一歩進むたびに足は冷たい砂に沈む。だが、手をつないだふたりの足取りはゆっくりでも確かだった。

「なあ、スターク。なんで『東』なんだ？」

「現世で朝陽は東から昇るんだってさ」

「ふーん」

「おまえと歩いていけば、いつかこの夜が明けるような気がする」
ワンテンポ置いて、みるみるうちにリリネットの顔が茹で上がった。

「……………だからあんたは馬鹿なんだよ、馬鹿！」

「いてっ」

蹴りを入れられ、スタークは思わず声を洩らした。リリネットはずんずん先へ歩いていく。

「くさい、スターク超くさい！」

「くさいのはおまえも同じだと思っけど」

「そういう意味じゃねえよ！ いっぺん脳味噌洗ってきやがれ、この天然！」

文句を言いながら、それでも手はつながれたまま。

引きずられる形になったスタークは、ふっと吐息のような苦笑をこぼした。

どこへでも、どこまでも、リリネットとなら行ける気がする。
永い夜の果てを越えて、ふたりのために昇る朝陽が見られると、
信じてみようかと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8874m/>

KALEIDO NOTE

2011年7月7日02時14分発行